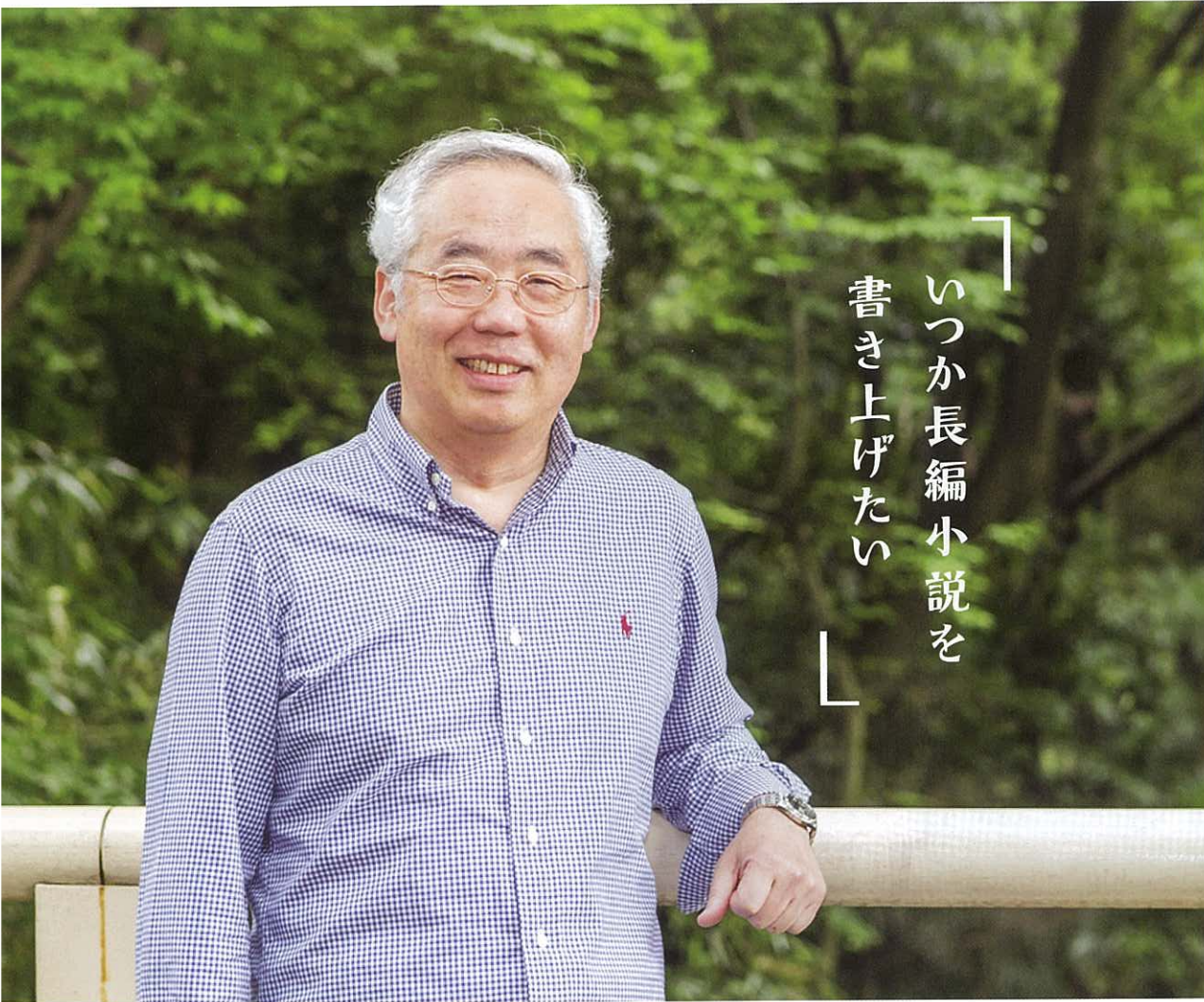


第4回室生犀星文学賞受賞

おちつかなさん

「いつか長編小説を書き上げたい」



今年3月に発表された第4回室生犀星文学賞（読売新聞北陸支社主催、金城学園共催）を世田谷区在住のおちつかなさん（61歳）が受賞しました。

超多忙なビジネスマンでありながら、余暇に小説を書き、楽しみ、立派な賞も獲得したおちつかなさんの生活スタイルや今後の夢など興味津々のインタビュー。

インタビュー・文／佃優子

創刊号

# おとなり

Contents [目次]



「おとな・り (re)」は公募で選ばれた区民ボランティアスタッフのみなさんが企画・取材・執筆を担当しています

03	インタビュー おちつかなさん	10	元気づくり講座 熱中症に気を付けて！ お休み処を活用しましょう	15	こちら! おとなり (re) 社会部 地域包括ケアの地区展開の取り組み
06	特集 せたがやを歩こう 世田谷公園の魅力 再発見!	11	ボランティアことはじめ 傾聴ボランティア ペットあれこれ 世田谷ペット (ワン・ニャン) 事情 1	17	世田谷区生涯大学特別コース
08	せたがや交流情報局 基礎から学ぶ、仲間と出会う いきがい講座体験レポート	14	「世田谷検定」にチャレンジを	18	スポーツで "せたがや人"の輪を広げよう
				18 (下)	師匠と弟子
				19	スフィーダ世田谷FCを応援しよう!
				20	せたがやイベントカレンダー
				22	100年先も残したい世田谷の風景

# 人生の極意は オンとオフの使い分け！



第4回室生犀星文学賞受賞。建設会社のバリバリの現役役員として、多忙な生活を送りながらの快挙。でも、ご本人はいたつて控えめで、「宝くじに当たったようなものですよ」と笑います。世田谷文学賞の小説部門で二席の実績はあるものの、731通の応募作品のなかから選考されるのは並大抵のことではありません。受賞の短編小説のタイトルは「父の勲章」。このモチーフを選んだのは、「いつか父のことを小説の中に残したい、という思いがあった」と述べます。一度書き上げた50枚の原稿を推敲し、何度も何度も書き直して、虚構の中にも保護司をしていた亡き父の思い出を織り込んだ渾身の作となり

ました。雪に彩られた故郷の風景も叙情を誘います。「母が受賞を大変喜んでくれ、いい親孝行になりました」。

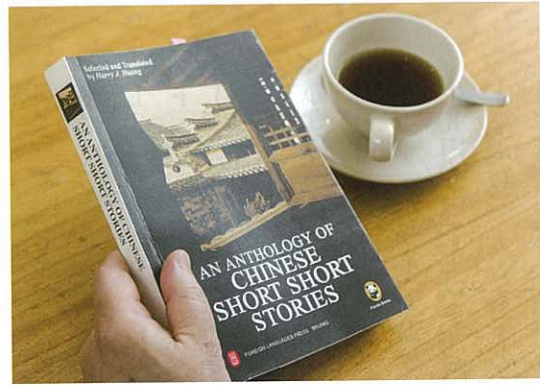
少年の頃から読書が大好き、でも、大学では商学部で会計学を専攻。「クラブ活動も英語研究会（ESS）と、文学とは無縁の学生生活でした」と語り、文学への情熱はそつと胸に秘めていたようです。卒業後はサラリーマンとして金融界に。得意の英語を駆使して、ワシントン、ニューヨーク、ロンドンと世界の第一線でビジネスに邁進。そんな忙しい毎日の中で、文学への傾倒のきっかけとなったのは海外赴任中に池波正太郎や藤沢周平を先輩に勧められ読んだこと。若い頃から親しんできた文学青年魂がふつふつと甦ってきたとのこと。特に好きな作家は吉村昭で、「彼の作品はすべて読みました。『戦艦武蔵』とか膨大なデータや証言をもとに構成されていて、読むのがとても楽しい。影響もずいぶん受けました」。

「もともと書くことは好きで小説らしき物はずつと書いてきたのですが、海外赴任時代から、本

## おちつかなさん

Profile

昭和 30 年生まれ。石川県出身。早稲田大学商学部卒業後、銀行勤務を経て、現在は建設会社役員。海外勤務の経験もあり、海外出張の際には、その土地の民話の本を買い求めるのが楽しみ。短編小説「父の勲章」が第 4 回室生犀星文学賞を受賞。世田谷文学賞で一席の受賞経験も。世田谷区内で妻、息子、猫と暮らす



海外で購入した“ショートショート”を読みながらの“幸せ”コーヒータイム

格的に執筆を開始しました」。帰国後、日本は金融危機の真っ只中でビジネス環境はさらに厳しく、ストレスの多い毎日を余儀なくされた。

「小説という空想の世界に浸ることで、ストレス発散ができた。小説を書くことは、私にとつてある種の現実逃避なんですよ」。

企業戦士として時間に追われる毎日を過ごすことと、小説を書くという、相反する二つの世界を上手に両立させています。

「特に海外出張は楽しみです。機内では、ゆつくり小説の構想を練り、パソコンで原稿をチェックできますから。妻にも、だれにも邪魔されず、同行者には仕事をしていると思われるし、私にとつては『一挙三得』です(笑)」とは、さすが現役サラリーマン!

日頃の執筆は奥様の「今日の夕食何にしますか?」の一声で集中が途切れてしまうそうで、主に家族が寝静まった真夜中や週末に地域の図書館で受験生に混じってパソコンに向かいキーボードを打つのだとか。現役は今、1年に

# リタイア後の自由時間が待ち遠しい

2、3本の短編小説を書くのが一杯。でも、いざれハッピーリタイアメントを迎えたら、たつぷりと時間を使い、じつくりと取材をして、資料を集めて、初の長編に臨んでみたい」と、次のステップに思いを馳せます。

「オンとオフは必要不可欠。人生、単色でなく様々な色を組み合わせることで世界も広がると思います」。

リタイアして、突然、時間が出来たら、さて何をしようか? することがないと悩む男性も少なくはない時代。現役中に次のことを用意し、夢を持つ人生は素敵です。

最後に日常の至福の時を伺いました。「好きなジャズが流れる中、ゆつくりコーヒーでも片手に、のんびり読書することですかね」。

## インタビューを終えて

雨上がりの午後、撮影のために新緑の等々力渓谷を散策。「息子が小さい頃はここでヤゴを捕ったり、よく遊んだものですよ。世田谷は公園も適度にあり、住みやすい」とおちつかなさん。ユニークなペンネームは奥様の命名だとか。「日頃から私は落ち着きがないもので…」と穏やかな笑顔。初の長編小説、今から楽しみにしています!

